

北海道で有機JAS！秋田県ではエコファーマー！！
 ～ 共和町と大潟村をまたにかけるECO農業の取り組み～
（共和町 ㈱なかもと農園 代表 中本 正雄 氏）

1 経営の概要

- (1) 有機栽培経験年数 8年目
(平成13年に有機JAS認定取得)
- (2) 経営規模(うち有機) 50ha(5ha)
- (3) 労働力 3名(本人、従業員2名)
- (4) 作物別作付面積及び生産量(H20年)

これからは
ECO農業の
時代です！



写真1 中本正雄氏

品目	そば(有機JAS)	そば(一般)	秋まき小麦	馬鈴しょ
作付面積	5ha	44ha	5ha	1ha
10a生産量	178kg	143kg	426kg	3,620kg

このほか秋田県大潟村で水稲45haを作付

2 有機農業取組の経緯等

(1)有機農業取り組みの動機と経過

- ・ 共和町において、高校卒業～昭和44年まで両親とともに稲作専業経営を営む。
- ・ 昭和45年より、大規模稲作経営を志し、秋田県大潟村に10haの農地を取得。
- ・ 現在では、共和町(分場)でそば49ha、大潟村(本場)で水稲45haを作付けし、北海道と秋田県を往復する営農を続けている。
- ・ 平成10年頃より、消費者の望む農業の実践は自家経営の発展につながると考え、「安心」・「安全」・「美味しい」農作物生産を目指し、大潟村(水稲)でエコファーマー、平成13年に共和町で有機JASの認定を取得した。
- ・ 有機JAS認定ほ場では、毎年5haの「**そば**」を栽培している。
- ・ 有機JAS認定ほ場や一般そばの作付は、町内の「遊休農地」を活用(賃借)している。

(2)有機農業取り組みの考え方

- ・ 消費者が望む農業の展開：人や環境に配慮した農業(エコロジー農業)を基本とし、「安心」・「安全」・「美味しい」農産物生産を目指す。
- ・ 農産物の付加価値化による農業経営の安定化。
- ・ 有機JAS、エコファーマーに取り組むことで、自らの生産コスト低減意識を高める。
- ・ 有機JASほ場は、遊休農地を活用することで地域農業の活性化につながる。

3 有機栽培管理技術等の特徴

[有機栽培管理の概要]

(1)品目(品種)

- ・そば(キタワセソバ)

(2)有機農産物として「そば」を選んだ理由

- ・「そば」は、病害虫の発生が少ないなど、容易に栽培でき、失敗のリスクは極めて低い。
- ・共和町内でそばを作付することで、大潟村の水稻との作業の競合が避けられ、細やかな栽培管理が可能。



写真2 有機栽培のそば

(3)有機栽培と一般栽培の違い

- ・基本的な栽培体系は、有機、一般栽培ともに変わらない。
- ・有機栽培：100%有機肥料を使用し、除草はほ場の砕土率を高め、は種後の鎮圧をしっかりと行うなど、耕種的対策に力を入れている。
- ・一般栽培：B B肥料を使用し、雑草対策は状況に応じ除草剤で対応。一般そばは秋まき小麦との交互作を実施している。

表1 有機栽培と一般栽培の比較

日 旬		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
		上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
作業 期節	有機栽培	種子選別	耕起整地	施肥:有機肥料は種			収穫	
	一般栽培			施肥:B B肥料は種	除草剤散布			
生育期節					出芽	開花	成熟期	

[栽培管理技術のポイント、工夫]

(1)土づくり

遊休農地の活用

- ・遊休農地を活用することで、有機農業に適する土づくりを時間をかけて行うことができる。

コーヒーかす・茶かすを利用した堆肥

- ・堆肥は、岩内町の飲料工場(日本アスパラガス株式会社)から排出されるコーヒーかすや茶かすを利用し、家畜糞と混ぜ使用している
- ・堆肥の施用量は、有機栽培ほ場で毎年10a当たり2t程度投入し、一般栽培ほ場では3年に1回10a当たり3t程度投入している。



写真3 (株)日本アスパラガス岩内工場

排水性の改善

- ・大型機械の踏圧などにより、暗渠排水機能が低下しつつある。暗渠排水効果を高めるため、心土破碎、チゼル耕、溝きりなどを積極的に実施している。

施肥(有機質肥料)

- ・有機質肥料は、宮城県のJAより比較的安価な魚粕入り有機肥料(有機100%)を購入し使用している。

表2 そばの施肥量 (kg/10a)

区分	窒素	リン酸	カリ
有機	7	16	7
一般	5	11	10

(2)は 種

は種量	は種方法	<ul style="list-style-type: none"> ・散播により、は種作業の効率化を図ることができる。 ・鎮圧ローラをしっかりと掛けることで、発芽は均一となり、生育促進につながり、雑草抑制効果も高くなる。
8 kg	散 播	

(3)雑草対策

- ・排水改善による初期生育の向上。
- ・砕土、整地はていねいに行い、砕土率を高める。
- ・は種後の鎮圧をしっかりと行うことで、発芽率の向上や生育促進が図られ、雑草抑制につながる。

(4)病虫害防除

- ・土づくりの徹底。(計画的な有機物の投入、排水改善など)
- ・そばは、病虫害の発生が少ない作物であり、有機栽培に適した作物といえる。

(5)収穫・乾燥調整

- ・収穫は、黒化率(成熟した子実の割合)70～90%(9月上旬～)で行う(コンバイン収穫)。
- ・有機栽培のそばは、一般そばとのコンタミネーション(混交)を防ぐため、最初に収穫・乾燥を行うようにしている。



写真4 コンバイン



写真5 乾燥施設



4 生産物の出荷・販売

(1) 有機栽培そばの実績

生産性

- ・有機栽培のそばは、一般栽培と比べ収量は高く、年次変動も少ない。このことは、長年の土づくりの成果が現れた結果と思われる。

販売単価

- ・有機栽培のそばは、品質面で優れていることから、一般栽培に比べ5%程度高値で取引されている。

販売確保の取り組みと課題

- ・有機栽培のそばは、道内製粉業者数社と契約栽培で販売している。(一部、庭先販売にも対応している。)

<主な課題>

- ・契約している製粉業者は、有機JAS(製造業者)の認定を受けていないため、有機食品のそば粉として販売されていない。
- ・新たな販売先を開拓したいが、個人で開拓するには限界を感じている。

表3 有機栽培そばと一般栽培の実績比較

区 分	10a当たり収量	販売単価(比率)
有機栽培	164～178kg	105
一般栽培	110～143kg	100

H18～20の3力年の実績

5 消費者との交流

庭先販売(直売)による消費者との交流

- ・ 有機栽培のそばは、農場に直接買いに来る消費者が徐々にではあるが増加している。
- ・ 庭先販売を通し、消費者と意見交換をする機会が多くなっており、「食の安心・安全」、「健康志向」などが高まりつつあることを実感している。

6 関係機関・地域等との関わり

- ・ 有機JAS認定ほ場や一般そばの作付は、町内の「遊休農地」を活用しており、関係機関と連携した中で、地域農業の活性化に一役買っている。

7 今後の課題と方向

- ・ 有機及び一般栽培のそばは、契約販売をしていることから比較的安定した所得を維持しているが、さらなる農業所得向上のためには新たな販路拡大が最大の課題である。
- ・ 販路さえ拡大できれば、地域の遊休農地をもっと活用し、有機JAS認定ほ場を増やしていきたい。
- ・ 有機農業に対する消費者の認知度は依然として低いので、行政には有機農産物のPRなどを強く要望したい。
- ・ 今後も「消費者が望む農業」=「農業経営の発展」につながるものと信じ、積極的な農業経営を展開していく。

作成：後志農業改良普及センター